

女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関する グループ学習の効果 — 運動有能感と心配に着目して —

The Effect of Group Learning Among Women's Junior College Students
when Concerned with Teaching Physical Play to Young Children
— Focusing on Sport Competence and Concerns —

丸井 一 誠, 井 邑 智 哉
Kazumasa MARUI, Tomoya IMURA

〈要旨〉

保育者志望の女子短大生に幼児への運動遊びの指導力を向上させるために体育授業でグループ学習をおこなったが、おおむね運動有能感が向上し、心配も軽減された。

グループ学習を行うには、まずは学生のレディネスを配慮したグルーピングを行うこと。そして運動遊びに興味関心を持たせ、安心して運動遊びの指導について学び合える友人と積極的に活動できる雰囲気の中で授業を行う工夫が必要である。また教員から学生同士で励ましたり、認めるようにアプローチすることや良い所を認められる友人関係が作れるように仕向ける必要がある。

〈キーワード〉

運動遊びの指導, グループ学習, 運動有能感, 心配

1 はじめに

今日の幼児期における身体活動の課題として、文部科学省(2011)が行った体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究において、体を動かす機会の減少傾向が伺える結果であった。日本小児保健協会(2011)の調査では、体を動かさない遊びの割合が増えている状況が示された。また約4割の幼児が近所で安心して遊ぶことのできる環境ではない状況であることが報告された。幼児期は多様な動きを身につけやすい時期であることから、運動する機会が少なくなれば、身体活動が低下し、体力の低下を助長しかねない。また多様な動きを身につける機会が少なくなると言える。文部科学省(2014)から示された全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果では、小学校入学前に体を動かす遊びを行っていない子どもは小学5年生時における体力合計点は全国平均を大きく下回る結果が出ていることから、幼児期に運動遊びを行うことは小学校の体力にもかかわることが示されている。

文部科学省(2012)から示された幼児期運動指針では、幼児期において「楽しく体を動かす遊びは、生涯にわたって運動(スポーツ)を楽しむための基礎的な体力や運動能力を発達させるだけでなく、複数の友達の関わりを通じ

て、コミュニケーション能力、やる気や集中力、社会性を育む機会を与えてくれる」ことから、幼児期における運動遊びの重要性を示している。しかしながら、今日的な課題が解決されず、このまま幼児期において体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の発育発達にも影響を及ぼすことにもなりかねない。

幼児期において体を動かして遊ぶ機会を提供することや多様な動きを身につけさせることは、幼児と多く接する機会がある保護者をはじめ、保育者が中核的に担う必要性がある。穂丸(1998)の研究によると、幼児だけに運動遊びを任せた場合、質的な発展は見られず、遊びの手段の学習が行われないと遊びそのものが広がっていかないと示唆しており、これらの調査から保育者が幼児に対して運動遊びに誘い、その遊び方を教える重要性が明らかにされている。

これらのことを踏まえると今後、保育者が幼児に運動遊びの機会を与え、誘っていくこと、さらにその運動遊びの仕方を教えることができる保育者の養成は重要である。

保育者養成機関の運動指導に関する科目について着目すると、池田(2007)は資格課程の科目のなかで運動指導に関する科目は少なく、学習時間も少ない現状であると指摘している。また保育者志望の学生の特性として女子が多く、穂丸

(2007)は体力の低下していること、また運動動作が未熟なことから、幼児のためのモデルとしての役割を果たせない学生が増加している事を指摘している。さらに及川(2012)によると、多くの学生は幼児の運動指導に対して自信が無く、不安に感じている傾向が認められている状況である。このような現状では、幼児への運動遊びの指導ができず、今後、幼児の運動遊びの機会の減少を防ぐことは容易ではない。

まずもって保育者養成機関の役割として、限られた科目・学習時間の中で、いかに運動遊びの指導を行える保育者の養成ができるかが課題と言えよう。

先行研究では、保育者志望の大学生を対象とした幼児の運動遊びの指導に関する授業の研究は少なく、実証的な授業研究は少ない。

そこで本研究では、筆者が所属していたA短期大学の女子学生に行われた「幼児体育I」の授業を対象として、幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果を検証していくことを目的とする。

2 女子短大生に対する幼児への運動遊びの指導に関する指導法

2-1 運動有能感と心配

女子短大生を授業で幼児への運動遊びの指導力を向上させるためには、どのような指導を行い、どのような要素を高める必要であるのであろうか。まずもって幼児への運動指導に関する心配を取り除き、自信を持たせる必要性がある。

及川(2012)の研究によると、幼児への運動指導に対する自信への影響要因として、身体的な有能さの認知度が見いだされており、授業を展開する際、学生の実態を踏まえ、身体的有能感と受容感に着目した授業展開を行うことを課題としてあげられている。したがって、運動遊びの指導力の向上に関する調査を行う上で、運動有能感を測定することは有意義である。また心配に関しては、小学校の教育実習の準備をしている大学3年生を対象にした木原ら(2002)の調査によると、「安全」、「不得意」、「運動理解」、「行事予定」、「好意」、「模範」、「把握」、「統制」、「悪影響」、「つまづき」、「施設管理」、「受け入れ」、「技術指導」、「協力関係」、「振る舞い」、「技能向上」、「ニーズ」の18項目が挙げられており、いずれも幼児への運動遊びの指導において心配に上げられる要素であり、これらの尺度は幼児への運動遊びの指導力の向上を明らかにする上で、援用できると考える。

2-2 グループ学習

これまでの体育における女子の態度に関する先行研究を概観してみると、徳永ら(1980)の研究では、体育授業において小学生女子は「集団活動」、「観戦・応援」、大学生女子は「人間関係」、「観戦・応援」の因子が男子と比べ、有

意に高かった。大杉ら(2008)の研究では中学・高校女子は男子よりも「仲間(チームワーク)」、「まもる」および「協力」因子を体育授業で重要視していると推察された。文部科学省(2013)が報告した「平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果」では、女子児童・生徒がもっと運動をしてみようと思うための条件として「好き・できそうな種目があれば」に次いで「友達と一緒にできたら」が50%を超え、2番目に高い項目であった。

これらの先行研究から、体育の時間に運動遊びの指導を学ぶことにおいて女子は「友人」という因子は重要であり、友人と協力的に行う学習が適していると考えられる。

本研究の対象となる「幼児体育I」では、女子学生が運動遊びの指導の仕方を学ぶ授業であるから、グループ学習¹⁾を用いて授業実践を行った。

3 方法

3-1 対象

2013年前期「幼児体育I」を受講したA短期大学の女子学生155名を対象とした。

3-2 授業内容

授業内容は人間の基本的な運動といわれる走・跳・投の運動の指導法や表現運動の指導法に関する内容から構成されている。はじめに教員から本時の内容を実践させ、その後4~8名程度の友人のグループをつくらせ、運動遊びをグループ学習にて開発してもらい、学生同士でその成果を発表する流れで行った。

幼稚園教育要領(2008)の幼稚園教育の基本において「教師には、幼児に主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開される」ことが大切であることから、学生自らも主体的な活動ができる環境の下、主体的に活動する体験をすることが大切と考えたため、上述した流れで行った。

以下、授業内容は表1の通りである。

表1 授業内容

1回目	オリエンテーション～授業を行う上でのルール確認と運動遊びや表現運動の意義～
2回目	体ほぐし運動
3回目	伝承遊び(個人・集団)
4回目	走運動
5回目	跳運動
6回目	表現運動Ⅰ(簡単なステップと身体操作)
7回目	表現運動Ⅱ(音やリズムを楽しむ)
8回目	表現運動Ⅲ(幼児向けの体操)
9回目	表現運動Ⅳ(季節や日常生活の表現)
10回目	表現運動Ⅴ(作品作りと発表)
11回目	手具を用いた運動Ⅰ(ボール遊び～投げる～)
12回目	手具を用いた運動Ⅱ(ボール遊び～蹴る～)
13回目	手具を用いた運動Ⅲ(輪を使った遊び)
14回目	手具を用いた運動Ⅳ(棒を使った遊び)
15回目	身近なものを用いた運動(新聞紙・ビニール袋などを使った遊び)

3-3 調査内容および分析方法

調査内容は「運動有能感」と「心配」に関する質問項目を設け、5件法のアンケート調査を行い、「1. まったく当てはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. ややあてはまる」、「5. あてはまる」として項目を設定した。

「運動有能感」は岡澤ら(1996)が作成した尺度を用いた。「心配」に関する質問項目においては、木原ら(2002)を援用し、保育者向けに文言を加筆・修正をした。さらに運動遊びの指導を通じて、子どもが運動を親しめるように変容する指導法が身につけているかどうか、その自信や不安に関する項目を発生運動学的視点から「子どもの運動への好意」、「子どもの運動への自信」、「子どもへの伝え方」、「つまづきへの処方」、「子どもの理解」を独自に追加し、さらに体育科教育学的視点から「効果的な指導形態」を独自に追加し、健康面からも「子どもの健康」を独自に追加した(質問項目19~25)。質問項目は表2-1、2-2の通りである。

同様の内容のアンケートを2回行い、1回目は「幼児体育I」の第1回目の最初の授業に行った。2回目は第15回目の最後の授業に行った。

第1回目に回収したアンケート結果をプレとし、第15回目に回収したアンケート結果をポストとし、各項目の変化を比較した。分析方法はt検定を行い、グループ学習の有効性を調査した。

表2-1 運動有能感の質問項目

1. 運動能力が働いていると思います
2. たいていの運動は上手にできます
3. 練習をすれば、必ず技術や記録は伸びると思います
4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います
5. 運動をしているとき、先生が励ましたり、応援してくれます
6. 運動をしているときに、友達も励ましたり、応援してくれます
7. 一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいいます
8. 運動の上手な見本として、よく選ばれます
9. 一緒に運動する友達がいいます
10. 運動について自信を持っているだけです
11. 少し難しい課題でも努力すればできると思います
12. できない運動でも、あきらめずに運動すれば、できるようになると思います

表2-2 心配の質問項目

1. 子どもが安全に運動できる
2. 運動の苦手な子どもへの配慮ができる
3. どの運動を教えるべきか理解している
4. 体育にかかわる行事予定を理解している
5. 子どもが自分の教えていることを好意的に評価してくれる
6. 自分が模範を示せない種目の運動を教える
7. 指導の際に一人一人の子どもの把握できる
8. 子どもの行動をコントロールできる
9. 今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう
10. 子どもの運動のつまづきを診断できる
11. 運動用具の準備や施設の管理ができる
12. 同じ教員・保育士に認められ受け入れられる
13. 各種目に必要な運動技能を指導できる
14. 子ども同士の協力的な関係をつくる
15. 教員・保育士の前でうまく行動する
16. 運動技能を向上させる指導ができる
17. いろいろな子どもたちのニーズに合わせる
18. よい運動指導ができる
19. 子どもたちに運動を好きになってもらえる
20. 子どもたちに運動を通じて自信を持たせることができる
21. 子どもたちに運動を通じて健康になってもらえる
22. 子どもたちに上手に伝えることができる
23. 効果的な学習形態を作れる
24. 子どもの気持ちに共感することができる
25. 子どものおつまづきを解消する指導ができる

4 結果と考察

結果は表4の通りである。

表4 運動有能感と心配

	プレ	ポスト	t検定	比較	
運動有能感	合計	39.26(7.90)	40.83(8.10)	t(130)=7.23, p<.001	ポスト>プレ
	身体的有能さ	10.23(3.84)	10.61(3.87)	t(130)=1.83, p<.10	ポスト>プレ
	統制感	14.42(2.77)	15.32(3.02)	t(130)=3.79, p<.001	ポスト>プレ
指導能力感	受容感	14.54(2.79)	14.80(2.91)	t(130)=0.95, n.s.	
	25項目平均	2.62(0.65)	2.97(0.49)	t(130)=6.12, p<.001	ポスト>プレ
	1	2.66(0.89)	3.03(0.80)	t(130)=3.70, p<.001	ポスト>プレ
	2	2.83(0.95)	3.06(0.86)	t(130)=2.52, p<.01	ポスト>プレ
	3	2.23(0.83)	2.83(0.74)	t(130)=6.43, p<.001	ポスト>プレ
	4	2.64(0.96)	3.18(0.77)	t(130)=5.69, p<.001	ポスト>プレ
	5	2.51(0.81)	2.87(0.69)	t(130)=4.42, p<.001	ポスト>プレ
	6	2.09(0.91)	2.51(0.81)	t(130)=4.56, p<.001	ポスト>プレ
	7	2.44(0.90)	2.89(0.84)	t(130)=4.89, p<.001	ポスト>プレ
	8	2.46(0.93)	2.86(0.82)	t(130)=4.48, p<.001	ポスト>プレ
	9	2.80(0.94)	2.91(0.91)	t(130)=1.08, n.s.	
	10	2.32(0.86)	2.69(0.87)	t(130)=3.89, p<.001	ポスト>プレ
	11	3.04(1.03)	3.34(0.84)	t(130)=2.98, p<.01	ポスト>プレ
	12	2.57(0.84)	2.83(0.71)	t(130)=3.24, p<.01	ポスト>プレ
	13	2.34(0.92)	2.70(0.82)	t(130)=4.20, p<.001	ポスト>プレ
	14	3.13(0.91)	3.26(0.82)	t(130)=1.46, n.s.	
	15	2.52(0.97)	2.86(0.82)	t(130)=3.49, p<.001	ポスト>プレ
	16	2.38(0.91)	2.85(0.82)	t(130)=4.93, p<.001	ポスト>プレ
	17	2.73(0.95)	3.13(0.82)	t(130)=3.91, p<.001	ポスト>プレ
	18	2.43(0.96)	2.73(0.75)	t(130)=3.03, p<.01	ポスト>プレ
	19	2.90(0.98)	3.16(0.86)	t(130)=2.81, p<.01	ポスト>プレ
	20	2.81(0.97)	3.06(0.81)	t(130)=2.90, p<.01	ポスト>プレ
	21	2.97(0.99)	3.32(0.86)	t(130)=3.61, p<.001	ポスト>プレ
	22	2.51(0.96)	2.80(0.90)	t(130)=3.21, p<.01	ポスト>プレ
	23	2.36(0.89)	2.67(0.67)	t(130)=3.72, p<.001	ポスト>プレ
24	3.46(1.07)	3.83(0.88)	t(130)=3.90, p<.001	ポスト>プレ	
25	2.45(0.95)	2.94(0.77)	t(130)=5.17, p<.001	ポスト>プレ	

4-1 運動有能感

グループ学習によって運動有能感が向上し、授業前と授業後と比較すると、有意な差があった。運動有能感の各因子に着目すると、「身体的有能さ」と「統制感」については授業前と授業後を比較すると、有意な差があり、これらは向上することが確認された。しかしながら、「受容感」については有意な差が認められなかった。

その要因を考察すると、及川の先行研究(2012)で行われた女子短大生は授業前では10.77に対して、本授業を行った女子短大生の「身体的有能さ」が10.23と低く、とりわけ「受容感」については16.51に対して、14.54と著しく低いことからA短大の女子学生は運動が苦手であったり、体育授業において友達同士で学び合うような授業形態が嫌いな女子短大生が多かったことが考えられる。さらに教員側から特定のグループを決めず、「身体的有能さ」が低い女子短大生同士に任せてグループ学習を行わせたことが要因として考えられる。米川(2003)によると、体育が嫌いな小・中・高校生の特徴として、「友人との交流」に対して体育の授業に対して否定的な評価をする傾向がある。また及川(2013)によると小学5・6年生の調査ではあるが、運動が苦手な子の特徴として、運動に限らず全般的に消極的な傾向があり、このような子に対して、ものごとに興味関心を持たせ、活動的に過ごせるような雰囲気づくりや導き方が求められる。

運動が苦手であったり、体育が嫌いな女子短大生同士でグループ学習を行うには、まずは運動が苦手であったり、体育が嫌いな学生に配慮した、つまり学生のレディネスを

配慮したグルーピングを行うこと。そして運動遊びに興味関心を持たせ、安心して学び合える友人と積極的に活動できる雰囲気の中で授業を行う工夫が必要である。また教員から学生同士で励ましたり、認めるようにアプローチすることや良い所を認められる友人関係が作れるように仕向ける必要がある。

4-2 心配

「悪影響」に関しては、得点が下がっているものの有意な差は認められなかった。木原らの先行研究(2002)において「悪影響」の質問項目を教師としての資質に分類するかどうか再考する必要のある項目としているため、今後、質問項目として検討する必要がある。

「協力関係」に関しては、実際の子ども同士の関わりを想定して授業を行うということは学生同士だけで行う授業において容易ではない。実際の子どもと対峙すること。さらに授業においても協力的な関係を築く声かけや促しの工夫を教えるが必要があると考えられる。

5 まとめ

保育者志望の女子短大生に幼児への運動遊びの指導力を

向上させるために体育授業でグループ学習をおこなったが、おおむね運動有能感が向上し、心配も軽減された。

グループ学習を行うには、まずは学生のレディネスを配慮したグルーピングを行うこと。そして運動遊びに興味関心を持たせ、安心して学び合える友人と積極的に活動できる雰囲気の中で授業を行う工夫が必要である。また教員から学生同士で励ましたり、認めるようにアプローチすることや良い所を認められる友人関係が作れるように仕向ける必要がある。

幼児の運動遊びの指導に関する体育授業だけでは、幼児に対しての運動遊びの指導の自信を身に付けることや不安の解消は難しい。体育授業において学生同士で運動遊びの指導の仕方を学ぶこと、そして幼児を対象として直接、運動遊びの指導を行う実体験を行い、自信をつけていったり、不安を解消していく必要がある。そのための機会を保育者養成課程校は保育所、幼稚園、こども園と連携を取りながら、運動遊びの指導が行うことができる保育者を育成する必要性があり、連携を深めて、運動遊びの指導をする機会を増やしていくことが今後の課題である。また今後、幼児への運動遊びの指導ができる保育士養成の授業実践の事例を増やしていき、効果的な授業方法を探究していくことが必要であろう。

注

- (1) 本研究におけるグループ学習とは、「小グループの教育的使用であり、学生が自分自身の学びと学習仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習法」(Smith, 1996)として定義し、授業実践を行うこととした。

引用・参考文献

- 穂丸武臣, 石川洋明, 太田悦生, 桑幸男, 滝村雅人, 成田徹男, 丹羽孝 (1998) 保育制度改革にかかる保育者の課題意識に関する実態調査研究. 名古屋市立大学人文社会学部研究紀要5: 248-256.
- 穂丸武臣 (2007) 保育者養成の立場からの提言. 子どもと発育発達5(1): 21-24.
- 池田裕恵 (2007) いま, 何故「幼児体育か」~子どもの身体活動およびその指導について考える意義とその方向性~. 子どもと発育発達5(1): 4-9.
- 金子明友 (2002) わざの伝承, 明和出版.
- 木原成一郎, 磯崎尚子, 磯崎哲夫 (2003) 教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究. 日本教科教育学会誌25(4): 29-38.
- 木原成一郎, 松田泰定 (2002) 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究. 学校教育実践学研究8: 1-8.
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf
- 文部科学省 (2011) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm
- 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm

- 文部科学省 (2013) 平成25年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1342657.htm
- 文部科学省 (2014) 平成26年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1353812.htm
- 日本小児保健協会 (2011) 平成22年度幼児健康度調査委員会. 平成22年度幼児健康度調査速報版. 小児保健研究.
- 及川研 (2013) 運動が苦手な子の自己像と友人関係—データをもとに一児童心理67(16). 11-16.
- 及川直樹 (2012) 保育者養成校における学生の運動指導に対する自信の実態と関連要因の検討. 幼児体育学研究4(1): 41-52.
- 岡澤祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究16(2): 145-155.
- 大杉貴康, 出村慎一, 藤谷かおる (2008) 体育授業に対する生徒の価値態度の構成要因およびその構成因子の性差の検討. 日本教科教育学会誌31(2), 29-38.
- Smith, K. A. (1996) "Cooperative Learning: Making 'Group work' Work" In Sutherland, T. E., and Bonwell, C. C. (Eds.), Using active learning in college classes: A range of options for faculty, New Directions for Teaching and Learning No.67, 71-82.
- 高橋健夫, 岡出美則, 友添秀則, 岩田靖 (2010) 新版 体育科教育学入門. 大修館書店.
- 徳永幹雄, 橋本公雄 (1980) 体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究. 健康科学2, 75-90.
- 米川直樹 (2003) 体育授業の好感度. 体育の科学53(12) 921-924.